小田原俳句協会報

年頭所感

明けましておめでとうございます。

一昨年は、梅まつり、桜まつり、小田原秋季の各俳句大会の第二部が、コロナ禍のため、すべて中止になってしまいましたが、昨年は、すべて実施されました。会長四年目にして初めてのことです。勿論、会員や理事の皆様のご協力の賜ですが、私たちは、コロナ禍から日常を取り戻しました。

また、昨年四月、当協会は節目の70回の総会を開きましたが、折りしもその十月、秋季俳句大会に市長の来臨を仰ぎました。協会に在籍して四半世紀、協会主催大会として初めてのことです。感激一入でした。

今年は辰年。私たちは改めてこの経緯を礎に、竜に負けじと前へ進みましょう。

会員の皆様のご健康とご健吟を祈って止みません。

令和六年元旦

小田原俳句協会会長　池田　忠山

「俳句おだわら」10句抄（676号より）

佃　悦夫　抄出

たましひに重さありとや秋あかね　星　一義
ときに鬼女時に仏や曼殊沙華　市川めぐみ
応へなきものへ語りて夜の秋　小宮　早苗
長き夜やペンと眼鏡とハーブティー　肥後ちさこ
こよろぎの浜へと続く虫の声　門松　鳳文
籾焼きの煙りの中の笑ひ声　新井たか志
十月の波の挫折と流木と　小澤　園子
茄子焼いて向こうへ突きぬけてしまった　大石　雄介
中央公園いも虫体操十七時　大石　和子
子蟷螂わらわら誰かいませんか　杉山あけみ

池田　忠山　抄出

夫見舞う橋の行き来や星月夜　斉藤　静
うつし世をしばし忘れて走りそば　勝木　澄子
野に街に風立つところ狗尾草（えのこ）　関戸わよこ
爽やかや角をぴたりと紙を綴ぢ　陌間みどり
もう一度星を見上ぐる夜長かな　小澤　純子
赤とんぼ稔りの風に乗りにけり　髙杉掘三朗
抜襟の美人画新酒汲みにけり　大島美恵子
公園の大き日だまり金木犀　片野　秋子
奉納の玉垣一基豊の秋　鳥海　壮六
驥尾に付す青蠅九里より十三里　小島ノブヨシ

新作８句

昼寝中　佃　悦夫

昼寝中悪臭悪習吹きすさぶ
北風を味わい盡す風見鶏
竹林が暴れ放題夏だった
この道を真直ぐ行けば鬼の家
昼寝中カルデラに真逆様とぞ
地震以後も雄叫びするを忘れめや
ハンモック悪の限りを考える
山椒魚夢遊病を患ったか

初鏡　池田　忠山

一湾に金箔の帯大旦
あけぼのや吃水ふかく初荷船
初夢の母は今でも割烹着
龍の字の富士へと跳ねて吉書揚
もう八十歳（はちじふ）いまだ八十歳（はちじふ）初鏡
掃初といふも机上を羽根箒
お降りのままにいちにち暮れにけり
餅花のしだれをくぐる相撲茶屋

理事会だより（12・14）

一、梅まつり俳句大会について①投句は一五七名二五三組で昨年を超えた②選句締切は一月十五日③大会の役割分担案検討　④表彰方式につきコロナ以前に戻す（事業部、総務部）

二、立春句会について短冊を配布し細部確認。

三、桜まつり俳句大会について①兼題「桜又は花」「蝶（春に限る）②投句締切二月二二日③選者特選賞は佃名誉会長、新井顧問、池田会長、春野、みなみ、山北に決定。（詳細は本号10頁）

四、その他①吟行会会計報告②大会選者につき実績を踏まえ秋季大会に向け検討することに。

理事会日程　1／11　2／8　3／14　4／11
（毎月第2木曜日　けやき15時より）

新作８句

冬座敷　　新井たか志

陶工の寡黙の背冬日差
寒月の蒼味沁みたる東窓
川尻に釣師混みをり冬の凪
寒行の白衣透けたる滝の領
能面の双眼深き冬座敷
水仙や音楽会の列にゐて
玩具屋の幾重に灯る聖樹哉
月中天一病息災年越せり

流木　　大石　雄介

のど仏にあたって曲がる冬の川
冬夕焼馬のような家立つてる
冬の雨たった今が降っている
真冬日のほら交差点が一匹
ももんがあももんがあ人が鳴く
ひかりの流木ぼくの本質も流木
ひきがえるゴンドワナ大陸のごと亙るよ
凩のしろながすくじら一号かな

俳句おだわら（12・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（11・24）

三日月と明けの明星鴉翔つ　久江報
茹で玉子つるりとむけて小春かな　足立　和子
日の色に素直に馴染む柚子の日々　川本　育子
冬菊の香をまとひたる散歩かな　高橋　小糸
折帖の料紙透けたる冬の月　山﨑　悦子
　　近藤　久江

◆山北（11・23）

裏おもて乾く俎板冬日和　由里子報
新米や共に歩みて八十路越え　和田恵美子
ひとしきり揺れしガラス戸神渡　尾崎　幸子
冬霧や御師宿坊の裏座敷　星　一義
石鹸の薄き泡立ち今朝の冬　石田加津子
　　竹下由里子

◆実のり（12・12）

歳月は脱兎のごとき師走風　たか志報
こだわりの牛筋煮込むおでん鍋　岩本ひさみ
ぼろ市や流行の曲の流れくる　杉本　久子
雑貨屋の「刃物研ぎます」街師走　木村　幸枝
　　新井たか志

◆鷹（12・2）

座布団は母の形見の黄八丈　青木　孝子

新作８句

裏表　石田加津子

半月盆に三粒の薬去年今年
年重ね新たに出会う初明り
裏白や伸びた気がする生命線
初夢へ湯船の中のストレッチ
長兄の大振りの椀福寿草
Ｙシャツの固い袖口年始客
甘味屋の細長い跡雪催
寒に入る漬物石の裏表

陽炎　小島ノブヨシ

嫂の臍縦長に花薺
灘の生一本鰐は食べ頃に
指窓を窺ふ雨夜の守宮かな
水炎えてをるなり修羅の鼻曲り
風疹の熱醒めやらぬ小灰蝶
齲歯抜いて瓦の鬼に呉れてやる
親鸞のふぐり湯中りしてをりぬ
あけびむべ叩いてみたい減らず口

離れまで爪先上り柿落葉　池田　令子
鳶の輪の無音に離る今朝の冬　西賀　久實
日輪の揺らぐ川藻や冬ぬくし　佐宗　欣二
合掌に終へたるヨガや冬浅し　須田　晴美
空色は子の好きな色銀杏散る　中田　笑子
茶が咲くと声の大きな薬売　百川　秀子
添乗員冬青空を喜べり　山﨑美知子
熱燗や男の辛い煮ころがし　柏木　良花
箔押しの皮の背表紙暖炉燃ゆ　庄司　下載
頭寄せ捲る図鑑や冬日差　瀬戸　りん
普段着のちちはは写す小春かな　高橋久美子
浅く掛くる席や車窓の渓もみぢ　中山智津子
函嶺の高空統ぶる鷹一羽　齊藤　桂
百舌鳥啼いて雑木山なす古墳かな　芹澤　常子
横丁に躱す体やちやんちやんこ　大木　敬子
小春日や脇往還の杉並木　大島美恵子
ジーンズの穴繕はず薬喰　田下　昌人
気風良き主売りたる寒の鰤　中根　和子
鳥声を聞きつ転(うた)た寝小六月　加藤　幾代
駅前にバスの路線図冬紅葉　高橋千代子
鬼の子の鳴き出しさうな吹かれやう　守屋　まち

新作８句

障子　小林永以子

不治永患の宣告心の沈む夕障子
「太陽の季節」の戯れ白障子
白障子開けずもの言ふ反抗期
母と娘の内緒の話障子内
綾取りの梯子の登る白障子
守られし嫁の座妻の座古障子
うち揃ふ積み木の家族晴れ障子
瑞光のあまねく障子あかりかな

保護猫　鳥海　壮六

買はれゆく城祉の猿や十二月
函嶺の落日早き蜜柑挽ぎ
今朝の春枯草色の袴佩く
人減りてマンションの増ゆ初明り
保護猫と九十二才のお正月
古きもの一切捨てて老の春
声かけのおげんきですか山眠る
曽我山は志朗の句集冬の梅

刻を知る古刹の鐘や大根引　米山　翠
潮花と空をカメラに一体化　來田　新子
綿虫や社に続く杉並木　大沢　年子
明日煮る干菜の匂ひ消灯す　片野　秋子
針に糸通して貰ふ小春かな　小林　環
冬晴やアコーディオンの指踊る　下平　美子
赤子泣く声病院の年の暮　鳥海　壮六
味噌汁に青もの浮かぶ霜夜かな　古屋　徳男
土蹴つて石踏んでゆく枯野かな　村場　十五

◆香雨・梅ごち（11・26）　忠山報

雨音や半日かけて煮るおでん　肥後ちさこ
傾けば傾くままに冬薔薇　関戸わよこ
通院のバス停冬日落ちかかり　青山　典子
一本の大根十色の味となり　門松　鳳文
乾杯のボージョレ・ヌーボ冬ぬくし　吉田　百代
いつまでも動かざる猫冬日向　吉田　康雄
走り根を埋むるほどの散紅葉　陌間みどり
そそくさと手袋を脱ぎ夕厨　小澤　純子
冬日差もろとも轆轤まはしけり　池田　忠山

◆こよろぎ（12・14）　つとむ報

十一月喪中葉書のぽつぽつと　髙杉掘三朗

千両の実をみて元気もらいけり　板谷　雅泉
名水の響を遠く冬櫻　植松テル子
冬浅し埴輪はどれもおちよぼ口　神山つとむ

◆沈丁（12・7）　寶子山報

掘炬燵ぶつかる足もなき広さ　若村　京子
掘炬燵四方八方手がのびる　柳澤ミサ子
生返事起きる気配のない炬燵　田中　惠一
霜の夜や兄と競ひし七並べ　河本　純子
登校の子らへ旗振る息白し　瀧本　敦子
白菜を洋風和風日は暮れる　勝木　澄子
炬燵抱く一行のみの一日かな　菅野　英余
船頭の話術に酔ひて炬燵舟　髙井　幸子
白髪のちらりがおしやれ冬帽子　片野　節子
カピバラや首まで浸かり冬構へ　峯尾ユキエ
地蔵さま枯草からめゑびす顔　清水美代子
白い目を梵字に変へる蔵の市　松下　俊之
色白が自慢の祖母や花八手　武居裕美子
正面に父の貌ある掘炬燵　寶子山京子

◆みなみ（11・18）　かほる報

たい焼き君海に遊んだ反抗期　加藤　富江
茶の花や耐えること娘に訓えたり　加藤れい子
茶の花や先ずは天気の話など　加藤　健治
白障子耳を澄ませば風の音　市川めぐみ
三文判少し曲がって押す小春　豊田　幸枝
居間障子少し開けある猫の道　斉藤　静
茶の花に清楚な乙女ふと思う　小瀬村信子
しらじらと夫いぬ部屋の白障子　柳川　紀枝
白障子閉めて世間を疎くする　加藤かほる

◆春野（11・19）　きよ志報

転がして言の葉磨く青木の実　秋山　昇
新しき案山子にからみつく夕日　伊藤はる子
初時雨先行く舟の櫂の音　内田知江子
水洟や笑つてしまふほど侘し　尾﨑　一夫
朝寒や隠し釦に手間取りて　瀬戸　悠
新しき靴で躓く神の留守　二見　和江
補聴器を外して長き夜となれり　長谷川きよ志

◆青梅（12・6）　幸子報

夜の深き咳に負けむと薬飲む　大塚　行人
どの径を行けども蜜柑曽我の山　湯本とし子
冬座敷篆刻（てんこく）の朱を極めけり　加藤まり子
冬の雨音してきたる夜半かな　久保寺トミ子
凩や空家のふゆる里の夕　田中　幸子

◆おほゐ（12・12）　秀泰報

余白道うめる間もなく年暮るる　瀬戸とみ子
缶蹴りぬカランと音の高き冬　高橋みどり
友の来て話ふくらむ炬燵かな　石井きよ子
手枕にはは浮び来て掘炬燵　廣田　悦子
山眠る良きも悪しきも懐に　小野　菊土
乾燥の大地踏みしめ冬の雨　石井千代子
青白く冴えて夜半の冬の月　中村　昌男
山茶花の小路の先を歌いけり　香川　花子
カノン弾き心鎮めし冬の星　二上　光子
吹き抜ける心の隙間も目貼りする　中津川晴江
どの位置も座れる炬燵向き合う孤　加藤　春江
冬ごもり本棚にある過去未来　中根登美子
虎落笛百鬼夜行の列正す　横塚　昌平
大空を自由に舞うは隼か　風間　秀泰

◆たけのこ（12・13）　悦女報

夜明けまえ寒の稜線茜色　三木　泰子
肋骨の声聞きながら柚子湯かな　久津間百合子
ありのまま素直に生きて銀杏黄葉　小宮　早苗
短日のからくり時計見て飽かず　宮崎　悦女
凩や狭庭にひとつ置土産　徳田　公子

◆零（12・21）　史郎報

これがまあ人の仕業かガザの冬　青木たけを
イマジンが聴こえるよ中村哲忌　伊藤　道郎
牡蠣飯は超うまいと駅弁に　川合　昌子
空爆に無垢な眼差しオリオンへ　佐藤　正子
屋台ラーメン昭和の匂い冬の夜　野川木一路
やわらかな月光こずえの葉がゆらぐ　中村　裕子
無人なり冬灯台も師の家も　岡本　史郎

◆草むら（12・18）　重満報

紅白を終えしラジオや年惜しむ　石井　秀稀
秋の蝶雄叫びしつつ剥き出しに　佃　悦夫
麦の芽や循環小数の並び　佐々木重満

◆無所属

酢をたつぷりと生牡蠣の溺るるまでに　小林永以子
猟銃音近し日輪脈打てり　畠　梅乃
秋晴れや飛んでゆきたや娘のもとへ　田代　孝子
捨てる本読み返してる夜長かな　一ノ瀬茂代
飛び縄の久しくおかれ芝枯るる　須田　聡子
駐在さん焼きそばぶら下げ村祭　出澤　洋子
ヘトヘトが少し落ち着き寒昴　柴田　礼子
パンデミックは昨日のやうに年詰まる　北村　文江

夏の終りの限界集落が二人　大石　雄介
酒匂川今日は何人生まれたの　大石　和子
天高く明治マンドリンクラブ会　木村美千代
木枯の手加減ということ知らず　小澤　園子
一陽来復風が煽るぞ四阡万　山本　すみ
湯豆腐や千言万言十万言　瀬戸　正洋
枯葉にも空へ散りたき心あり　岩楯惠津子
石蕗咲いて木下の庭を明るくす　蓑宮　わか
磨きいる爺の愛車や冬の星　山口　千代
妖しき夜天に召さるる雹の音よ　穂坂志げる
ひとりの夜「いい日旅立ち」風邪声で　神野美代子
菊冷や席ゆづり合ふ待ち時間　山田　照子
大根抜く影に力の出ておりぬ　田畑ヒロ子
桃咲いて雨が素通りしてをりぬ　小島ノブヨシ
槍投げの槍の切っ先寒波来る　杉山あけみ
女坂登りし先のみそおでん　岡田　典代

（十二月号追加）

ハロウィーン中庸ならぬ人の群　柴田　礼子

俳句おだわら鑑賞（令和5年11月号）

高橋久美子

長き夜やペンと眼鏡とハーブティー　肥後ちさこ

漸く快適な秋になり、そして夜長に。久し振りに友への手紙を書いたりゆっくり本も読みたいと、思いがいろいろ膨らむ。ペンと眼鏡とハーブティーは、長い夜を豊かな時間にするための必須アイテムなのだ。

助詞以外は全て名詞で成り、又、季語と物のみによって想像が広がる巧みな句である。

さて今夜は、クラシックでも聴きながらハーブティーを楽しんでいるのでしょうか。

田中惠一

父の忌や備前徳利に稲一穂　百川秀子

収穫したばかりの稲の一穂を父愛用の徳利に挿して父の忌に報告できることの幸せを感じとれる一句になっています。作者の父や農作物に対する真摯な気持ちが直に伝わってきます。

備前徳利から察するに父上はかなりのお酒好き。明日の英気を養い家族団欒の一杯であったように思います。はからずも六十年程前に、焼締めのぐい呑みで晩酌していた私の父親を思い出させてくれた句に出合い感激しました。

城苑俳句・春の部

（合同句集第十二集75～89頁より近藤久江抄出）

満開の花押し上げて空の青　高橋みどり
うぐひすや古墳の裾の畑仕事　中山智津子
年金の天引き貯金桃の花　西村　英子
ものの芽のからみし畔に靴一つ　野川木一路
新婚の借家小さし春の鳥　陌間みどり
鳴呼さくらムンク叫びて絵の中へ　長谷川きよ志
紅灯も深夜保育の灯も朧　畠　梅乃
雛壇のすまし顔なる女雛かな　濱本　主雄
桜蘂降る誰も来ぬ道となり　林　スミ子
花蓆嵩のなき膝折りにけり　廣川　公
それぞれにその花らしく咲き誇り　廣田　悦子
足元に出会いが有りてすみれ草　二上　光子
お喋りが途切るる梅の香が生るる　二見　和江
合流を急がぬ水やつくし摘む　古屋　德男
さくら仰ぐや喉仏みなさらし　寶子山京子
立春の渚に躍る影法師　牧石美千雄
大空に伸びる大樹の芽立ちかな　三木　泰子
リハビリの散歩を誘う春の風　蓑宮　わか
遠山に春の月おく地震のあと　宮崎　悦女
梅一本古武士の如く控へけり　村場　十五
梅東風や触読の人顔上ぐる　百川　秀子
初蝶や時々動く古時計　森　正勝
あたたかや縄文土器の広き口　守屋　まち
風気淑令和迎へて桜満つ　柳川　楊雨
涅槃図に孤独死の友重ねみる　柳澤ミサ子
春泥は土の泣きべそかもしれぬ　山岸　秋光
菩提寺の石階のぼり甘茶かな　山口安規子
春スカーフゆるりと曲る青山河　山口　千代
梅ほつほつ狭庭の光あつめけり　山﨑　悦子
春疾風吹き戻されて鴉消ゆ　山﨑美知子

梅まつり俳句大会について

日　時　令和6年2月10日（土）
会　場　小田原市民交流センターUMECO
　　第1・2・3会議室
受　付　11時　投句締切　12時　開始　12時半
席　題　春季雑詠1句　当日発表席題1句
　　選：総互選
結社賞　各グループは当日までに千円相当の賞を
　　ご用意の上事業部にご提供ください。
理事集合　9時半
※大会は土曜日です。ご留意下さい。

第77回小田原桜まつり俳句大会

第一部　作品募集

兼　題　「桜又は花」「蝶（春に限る）」（いずれも傍題可）各一句一組　未発表作品に限る

締　切　令和六年二月二十二日（木）必着

整理費　一組に付き千円（句稿に同封、何組でも可）

投句先　〒250・0111 南足柄市竹松一四六三ー七
加藤かほる宛　〇四六五ー七四ー五〇六二

＊作品は投句原稿どおり印刷しますので、楷書で、大文字、小文字ではっきりとお書き下さい。

＊第二部への参加・不参加もご記入下さい。

選　者　協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）

賞　県知事賞以下二十位まで　選者特選賞六人

第二部　俳句大会

日　時　令和六年四月七日（日）

会　場　小田原市民交流センター（ＵＭＥＣＯ）

受　付　十一時　投句締切：十二時　開会：十二時半

整理費　五百円（呈飲料）

席　題　春季雑詠二句　総互選

賞　市長賞以下五十位まで　参加賞

＊お願い　会場は飲食可能ですが、なるべく食事を済ませてご参集下さい。時節柄マスクの着用及び感染症防止対策にご協力下さい。

（主催）小田原市観光協会　（主管）小田原俳句協会

（後援）各地俳句協会

立春句会のお知らせ

日　時　令和6年2月4日（日）雨天決行

集　合　小田原城天守閣　本丸広場　10時

短冊つるし後句会　・短冊は12月理事会にて配布（立春・梅に因んだ句、1月の理事会または当日に持参下さい）

＊短冊は同じ所に集中しないで城址公園に広く吊るしましょう。又、雨風に飛ばされないようしっかりくくり付けましょう。

句会場　そびえ二宮呉服店2階（元オービックビル銀座通り反対側角）小田原市栄町2ー13ー1（電話0465ー22ー8121）

＊なるべく食事を済ませてご参集ください。マスク着用等。

会場利用時間　12時～15時（受付12時～）

会　費　五百円（賞品代等）

投　句　当日嘱目3句を短冊にて（受付にて配布、締切12時30分）

句　会　13時より総互選　披講は各自

＊事前申込の必要はありません。お仲間（会員以外も可）をお誘い合わせの上現地にご集合下さい。

小田原俳句協会　〒二五〇ー〇〇一二　小田原市本町二ー一三ー二　池田　忠山方